
編集後記

ジョージ・オーウェルは、著書『1984年』の中で「ビック・ブラザー」がすべてを監視する全体主義国家について描いているが、国家・大企業による情報管理資本主義による支配が今急ピッチで進んでいる。我々が毎日使っているスマートフォンをはじめ経済のIT化、AI化、個人情報の一元管理化が社会にもたらす影響は計り知れない。権威主義的な国家や巨大IT産業などデジタル・ファシズムによる管理・監視が強まる現代社会の中で、ウィリアム・I・ロビンソンはライザ・エリオットの小説の言葉を引用して「ビック・ブラザーは全体主義国家から現れたのではなく、全体主義的な非-国家から現れた」(『グローバル警察国家』より)と紹介し、社会的統制と抑圧的のシステムであるグローバル資本主義は人類的な危機と警告している。

本号では二つの特集が組まれている。最初は「ウィリアム・I・ロビンソン 人類的な危機と「21世紀型ファシズム」」として論文一つ、研究ノート一つ、書評二つ、次は『日本の国際協力 中南米編』の寄稿一つである。

最初の松下論文は、61巻第2号の続編であるが、本号では「IV分岐するコロナ後の世界」として、ロビンソンのいう21世紀型ファシズムはグローバルな資本主義の危機が生み出した政治・経済・社会に蓄積された諸矛盾の帰結であると述べ、現在のパンデミックによるグローバル警察国家化の拡大と監視社会を危惧している。

続く、中村研究ノートは、ロビンソンの問題提起であるトランスナショナル国家形成論と近年のラテンアメリカ研究に関する三つの問いに対して議論を展開している。国家とグローバル資本の利害関係、グローバル資本主義体制の構造的危機、ピンク・タイド政権の限界はグローバル資本主義体制へ一層の従属をもたらしているという分析は注目できる。

北野書評論文は、ロビンソンのグローバル資本主義を手がかりに、ロビンソンへの分析と率直なコメントを大変おもしろく読んだ。特に現状の批判的分析と今後の対応戦略に落差があることを述べ、ラトゥーシュやエスコバルらのトランジション運動やエコロジー運動なども取り上げて欲しかったという、ロビンソンに対する批判は同感する。

岩佐書評論文は、「グローバル警察国家」とは何を意味しているかの見解を述べている。同書の翻訳者岩佐は、グローバル警察国家とはグローバル資本主義が過剰蓄積を国民-国家が抑圧と戦争に向かい警察国家化する構造だと語り、トランスナショナル国家資本家階級と国民-国家の関係性を実証的・理論的に捉えるべきであるという問題提起は検証に値する。

特集2の松本の論考は、ウジミナス(ブラジルのミナスジェライス製鉄所)から「持続可能な開発目標」までを辿ることを通じて日本の対中南米への国際協力を振り返り、日本の対中南米ODA政策、中南米の日本社会が日本と現地との懸け橋として果たしてきた役割、多くのラテンアメリカ・カリブ海研究者が参加した本書の意義を強調している。特に中南米累積債務危機に対して米国と協力して日本が果たした役割について、筆者も興味深く読んだ。

最後に、今回の本誌の編集作業は、長島怜央理事(副編集長)を中心に行ったことを付記する。

(2022年1月29日 編集長 重田康博)

アジア・アフリカ研究

2022 年 第 62 卷 第 1 号 (通巻 443 号)

2022 年 1 月 25 日発行 機関購読料：年間 15,000 円

編 集 人 重 田 康 博

発 行 人 中 野 洋 一

発 行 所 特 定 非 営 利 活 動 法 人
ア ジ ア ・ ア フ リ カ 研 究 所

〒170-0005 東京都豊島区南大塚 2-17-10

Tel&Fax: 03 (5972) 4740

E-mail: aaken@bz01.plala.or.jp

URL: <http://www.aaij.or.jp/>

印 刷 所 三 和 印 刷 (株)
長野県長野市川中島町 1822-1

本誌上で各論考の著者がその責任において述べた意見は、特定非営利活動法人 (NPO 法人) アジア・アフリカ研究所としての見解を表わすものではありません。

The articles in *Quarterly Bulletin of Third World Studies* do not represent the views of The NPO Corporation Afro-Asian Institute of Japan (AAIJ). Responsibility for opinions expressed in them rests with their authors.